

教育書

2023.12.19

私の書齋には、おびただしい量の本がある。その半分は、いわゆる教育書である。自分でも、なにゆえにこんなに買ってしまったのかと思う。買ったからといって、すべてのページを読んでいるわけではない。中には、数ページしか読んでいないものもある。読んではみたが、さほど役に立っていないものもある。私の場合だが、教育書を買うというのは、そのときの自分のやる気の表れだったのだと思う。あるいは、困ってすぎるように買った本もある。

9月に自分で教育書を出版した。全国の書店に流通し、ネットでも購入できる。では、地元の本屋さんにはあるのかと行ってみた。あった。教育書コーナーの国語のところにあった。教育書コーナーがない書店も多い。そういった書店にはないのかとあきらめかけていたところ、郷土の本というコーナーにあった。危なく気づかずに帰ってしまうところだった。とにかく、置いていただけ。ありがたい。

仙台に行った際にも、書店に寄ってみた。教育書コーナーが狭くなっていることに驚いた。福島ならば、仕方ないかと思える。百万都市の杜の都仙台でもこうなのかと愕然とした。寂しい気持ちになってきた。

なぜ、教育書コーナーが狭まっていくのか。売れないからである。本が少ないから余計に売れなくなる。悪循環である。中学校の教科の本は売れないと、出版社の方が言っていた。私が出したのは中学校の教科の本である。すなわち、売れない本の部類に入る。

10月18日には、日本経済新聞の一面に、書籍の広告が出た。それは、ありがたいのだが、日経の読者が、教育書を買うとは考えにくい。それも、中学校の国語の本である。宣伝というよりは、記念という意味合いが強くなってしまった。

本が売れないのは、時代の流れなのかもしれない。教育書も、その流れに乗っているとも言えるが、果たして教員の力量アップには、影響はないのだろうか。文部科学省や県教育委員会、市教育委員会などからも、リーフレットなどの資料が出されている。それらを紙媒体にして、ファイルでしようと思えば、ダウンロードをしないといけない。

本でも、資料でも、教員自身が読まなくなってきたはいないだろうか。少ない知識や情報で、悪戦苦闘し、もがいている教員が多くはないだろうか。本を買えば、すぐに解決するというものでもないが、ヒントや参考にはなる。実践書であれば、とりあえず、そのままやってみればいいのである。きっと、多くのことに気づくはずである。そこから、自分なりのアイデアが生まれていく。

書店には、様々な専門書コーナーがある。にもかかわらず、書店から教育書コーナーが消えていくというのは、もしかしたら教員として恥ずかしいことなのではないか。そんなことを考えた。